あびこの文化

発行人
美崎 大洋
我孫子市
高野山
250－23
04(7182)
0861

あけましておめでとうございます

このたび石川県能登地方を震源とする大規模な地震により、お亡くなりになられた方々に謹んでお悔やみを申し上げますとともに、被災されました皆様に心からお見舞い申し上げます。

また、被災者の救済と被災地の復興支援のためにご尽力されている方々に深く敬意を表します。

会長　美崎　大洋

平素は当会の活動に格別のご協力をいただきありがとうございます。

昨年の日本経済はコロナ禍からの正常化が進んだ一方、円安や原材料費の高騰を受けて企業は値上げを繰り返しました。会員の皆様、新年をどのように迎えられましたでしょうか？

激動の一年を振り返って

ロシアのウクライナ侵攻はこの2月で丸2年を迎える。国連の事務総長は声明を出し、ロシアがウクライナに対して、大規模な攻撃を行ったことを最も強い言葉で非難した。結末の見えない両国の争いが続く一方で、10月に、ガザを実効支配するイスラム組織ハマスがイスラエルに大規模な奇襲攻撃を仕掛け、民間人らを殺害、約240人を人質に取った。イスラエル軍は「ハマス壊滅」を掲げてガザへ報復攻撃を開始。学校や病院も被害を受け、パレスチナ側の死者は2万人近くに上った。いかなる宗教も平和を求めると主張しているが、現実をみると、宗教は戦争と無縁ではないと考えざるを得ない。

昨年、世界中で異常気象が発生し、日本の気象庁は夏の日本の平均気温が、統計開始以降で最も高かったと発表した。「猛暑日」の日数は全国38地点で最多となった。夏を過ぎても暑さは続き、9～11月の平均気温も統計開始以降、最高を記録した。

もはや国内だけの話題ではなくなったが、昨年は大谷翔平の話題で始まり、そして終わった。3月のWBC優勝から始まり、メジャーリーグ(MLB)で12冠を獲得し、ドジャースへの移籍が決定するまで、二刀流大谷は野球界の話題を独占した。日本人としての枠を超え、国際プレーヤーとしての活躍といえる。オリックスの山本由伸投手は日本で史上初の連続3年4冠を達成し大谷に続き、同じドジャース入団を決めた。「冠」といえば史上初の8冠を達成した将棋の藤井聡太の偉業も特筆すべきだろう。

国内での企業の不祥事は昨年も絶えなかった。中古車販売大手ビッグモーターによる保険金の不正請求問題は世間を驚かせ、深刻な顧客離れが続いている。またダイハツ工業は、認証試験を巡る不正で全車種の出荷が停止に追い込まれた。

政界の不祥事も露見した。自民党最大派閥の安倍派による政治資金パーティー収入の裏金化疑惑が判明し、同派の4閣僚と5人の副大臣が交代する事態となった。東京地検特捜部は、政治資金規正法違反容疑で安倍派と二階派への強制捜査に踏み切った。裏金化に関与した議員は数十人にのぼるとみられる。他の派閥でも収入の過少記載などの疑いが浮上している。

昨年はスポーツ界での日本人の海外での活躍が目立った。8月、ハンガリー・ブダペストでの世界陸上競技選手権大会で、女子やり投げの北口榛花が優勝。決勝の最終投てきで66メート73の大投てきを見せ、日本の陸上女子フィールド種目で五輪・世界選手権を通して史上初となる金メダル獲得となった。

プロボクシングの井上尚弥は1月、保持していた世界4団体のバンタム級王座を返上し、スーパーバンタム級への転向を発表。7月に有明アリーナで同級のWBC・WBO 世界統一王者スティーブン・フルトンに挑戦し、8回TKO 勝ちをおさめ、これにより世界で4階級を制覇した。さらに12月にはスーパーバンタム級のWBA、IBF王者のマーロン・タパレスに10回KO 勝ちし、史上2人目となる2階級での4団体統一王者となった。

車いすテニスの小田凱人(17)は、6月の全仏オープン男子シングルスで初優勝、史上最年少で世界ランキング1位となった。7月のウインブルドン選手権(全英)でも優勝、2大会連続で4大大会を制覇した。同競技の東京パラリンピック金メダリスト、国枝慎吾は1月、世界ランキング1位のまま引退を発表。3月に国民栄誉賞を受賞した。

「チャットGPT」などの生成AI(人工知能)が日本でも急速に普及したのも昨年だ。政府は、「AI戦略会議」を開き、AIに関する政策の方向性の議論を開始した。

当会の話題としては、2月、講演会「各地の将門伝説・伝承を探る(その2)」を実施、それぞれの地域で平将門を特に研究、調査されている方から、将門伝説の披露があった。

「我孫子市に郷土資料センターを」の目的で定期的に会合を持っている(歴史、文化関係)5団体が2月、市長選当選のお祝いも兼ねて星野市長を訪問した。5団体では6月にバスをチャターして、市原市の「市原歴史博物館」を見学し、地元に根付いた博物館運営の実体を見ることができた。

6月5日(日)、あびこ市民プラザホールにて令和5年度の総会が開催された。総会に先立ち同会場にて第四十一回記念文化講演会(我孫子市後援)が開催され、「白樺派の文人たちの我孫子時代・その後」の演題で山本鉱太郎氏が講演された。

「美しい手賀沼を愛する市民の連合会(会長：八鍬雅子氏、略称「美手連」)」には当会からも役員(理事・美崎会長、運営委員・牧田役員)を出しているが、一昨年から、当会会報「あびこの文化」に「美手連」の活動状況を掲載している。美手連の活動は多岐に亘っているが、一方、その地道な活動は手賀沼周辺の人々になかなか伝わらないのが現実である。「あびこの文化」が活動の実態を知って貰うために少しでも役立てばと願っている。

会報3月号からは新たに平林清江会員による長期連載「世田谷の頃の原田京平ファミリーを知る」が始まった。白樺文学館では、志賀たち白樺派が創造した文化空間「我孫子・白樺派」を継ぐ者として、原田京平を位置づけており、連載の今後の展開について興味を持って見守りたいものである。

会報については、今後も会員の皆様のご期待にそえるよう、内容もより充実させていきたいと思っている。

本年も会の活動・運営にご協力をお願いします。

美しい手賀沼を愛する市民の連合会：略称（美手連）」活動に参加して（第７報）

牧田　宏恭（ひろゆき）（会員）

会報「あびこの文化」の毎号に、「美手連」の活動についての報告を連続して掲載させていただいているが、今号(第197号)は、2023年11、12月の主な活動内容に絞りご紹介する。

1・「手賀沼統一クリーンデイ」行事の開催

手賀沼流域の５域地区において、毎年11月末から12月初旬に開催される頭書の行事は、今年度(第21回)を迎えた。毎回「美手連」が主催し、併せて手賀沼を取り巻く流域の５市並びに手賀沼水環境保全協議会の協力を得て、作年の11月26日「白井地区・金山落(かなやまおとし)」、続いて12月３日に「我孫子地区」、「柏地区・大堀川」、「柏地区・大津川」、「印西地区・亀成川」の５地区にて実施された。(手賀沼流域とは、会報「190号:令和４年11月１日発行」にて紹介の通り)。(**図1**)は「手賀沼統一クリーンデイ」の案内チラシ)。

図1

「手賀沼統一クリーンデイ」行事は「**手賀沼とともに生きる手賀沼流域の自然・生活環境のより良いあり方を学習し、美しい手賀沼をよみがえらせることを**」目的に活動する「美手連」の諸活動の一貫として、市民の参加も得て毎年実施されている。

今年度の実施結果は、「美手連」事務局の纏めによれば、開催された５地区の参加者数合計は456名(前回比:99・1%)、ゴミ0・83トン(前回比:48・9%)、外来水生植物1・27トンであったが、その内ゴミの集計は、前回まで行われていた我孫子地区の一部地域は実施されなかった上、ある地域の計測に問題があったようで、ゴミの値として前回と比較するには無理があったようだ。従って、参考値とするに留めるとのことであった。なお、「外来水生植物」の重量値は、45リットル入り袋にて１袋:12kg(乾燥後)に換算した値を基準にしている。

我々「我孫子の文化を守る会」は、手賀沼公園駐車場地先の「外来水生植物駆除」に、美手連関係参加者として計５名(美崎会長、佐々木副会長、佐藤やす子さん、川上民代さん、牧田)が参加した。

美手連のデータによれば、参加者数は柏・大堀川地区、我孫子地区、白井・金山落地区が前年以上、ゴミ収集量は印西・亀成川地区、白井・金山落地区が前年以上という結果だった。

問題視している「ナガエツルノゲイトウ」など「外来水生植物」は1・27トン(前年比81%、0.3トン減)は。我孫子地区と印西・亀成川地区のデータであり、両地区ともに減少という結果であるが、白井・金山落地区は例年、統一クリーンデイ以前に実施済で、上記のデータには含まれていないことを付記する。

内、参加者の最も多い我孫子地区の詳細は下記の通り。

「我孫子地区」は、12月３日(日)快晴の「手賀沼公園広場に集合。午前９時、星野順一郎我孫子市長の開会挨拶、市役所「我孫子市・手賀沼課」の女子職員による「実施要領」の説明の後、実施場所となった「手賀沼公園駐車場地先」「手賀沼公園北岸下」「手賀沼公園ふれあい護岸」「手賀沼公園～根戸新田」「手賀沼公園～手賀沼親水広場」の５か所の地域に分れ、午前11時までの２時間弱行われた。(**写真１**は集合場所風景)。

参加者数は、我孫子市:８名、美手連関係:64名(美手連事務局関係:６名、我孫子野鳥を守る会:17名、アルバトロスヨットクラブ:11名、船戸の森の会:10名。我孫子の文化を守る会:５名、その他15名)、我孫子青年会議所:４名、ボーイスカウト・ガールスカウト:100名、我孫子市職員組合:３名、一般参加:141名の総数:320名である。

当会のメンバー５名は、前述の「外来水生植物駆除」の内「袋詰め→運搬車に積み込み」を担当、かなりの重労働になったが、時間の経つのも忘れ皆奮闘した。(**写真２、３**)

この「手賀沼統一クリーンデイ」行事の実施所は、「手賀沼の極一地域」であり、「手賀沼を市民の手で綺麗にしよう」「貴重な自然環境を守ろう」をより市民に浸透させていくための緒であって、モデル・啓蒙のための作業に過ぎない。しかし「継続こそ力なり」となってほしい。

写真2

写真3

写真1

2．手賀沼船上調査

昨年12月20日(水)「手賀沼船上調査」が実施された。

「手賀沼船上調査」は、手賀沼全域を調査エリアにし、「ナガエツルノゲイトウ」「オオバナミズキンバイ」「マコモ」「ヒメガマ」「ヨシ」などの生育状況(分布域・繁茂状況・その変化他)を船(ボート:みずすまし号)上からきめ細かく観察する活動で、以前より継続されている。

私は、初めての参加である。参加者は「千葉県立中央博物館:林紀夫さん」「国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構:(略)農研機構 嶺田拓也さん」「美手連:八鍬雅子会長、小倉久子顧問、間野吉幸顧問、竹内順子事務局長、古川政治理事、加藤マリ子運営委員、半沢裕子運営委員、牧田宏恭運営委員」の10名

午前9：00乗船→我孫子手賀沼漁協桟橋より出航→手賀大橋→手賀沼西側(上沼)周回→再び漁港桟橋付近→手賀沼東側(下沼)周回→フィッシングセンター桟橋→**午前11：55**手賀沼漁協桟橋に**帰航**→昼食→我孫子市生涯学習センター(アビスタ)に移動→**午後1：00**調査結果について**「意見交換会」→午後3：00終了**。6時間に及ぶ手賀沼調査であった。**写真4**はみずすまし号)**(調査で確認した事)**

写真4

①ほぼ全域にわたり「ヒメガマ」群落が驚くほどに減少し全滅に近く、その「存在の痕跡」が僅かにみられる状況。特に、下沼の「フィッシングセンター」付近は以前からかなり群生状態だったが、全滅と言ってよいほどの有様だと、以前より調査活動をされているメンバーが口を揃える。**(写真5)**

②「マコモ」の姿が貧弱・白っぽく小さな塊状を呈し、点々と残っている程度。**(写真6)**

写真5

写真6

③「ヨシ」は面状に連続し生育している筈が、量が減少し沼岸側に後退、個々に株立ち状となって、周りがえぐられた様な姿。**(写真7)**

「ヒメガマ」→「マコモ」→「ヨシ」の順で衰退が進んでいるようだ。

④沼の各所に設けられている「植生帯」はその内・外側に「ナガエツルノゲイトウ」「オオバナミズキンバイ」が這いつくばる様に目立つ。**(写真8)**

また沼の水辺付近の「ヨシ」が成育する根元には、「オオバナミズキンバイ」の朱色の茎がまとわりつくように各所に見られる。

(このほか、本来の調査目的から外れるが)

⑤釣り人が構築したとみられる「釣り桟橋」や廃棄物が「ヨシ」に覆われて存在。沼周りの遊歩道からは発見が無理な「違法構築・廃棄物など」も船上から確認できる。

写真7

写真8

以上この「調査」から、手賀沼の水生植物は「かなり衰退が進む危機的な状況で、原因究明を急ぎ対策を急がないと、近々大変なことに成る」と言えるのではないか。

「手賀沼」の自然を宣伝し、観光・学習を目玉に来訪者を遠方から募る道具とし、ビジネス化している一部の団体や、観光利用を声高に唱える議員の方もいらっしゃるように見受けられるが、それよりも先ず「手賀沼の実態」を知って、将来のため施策を講じることに専念していただきたいと思う。観光誘致などはその次の事だと私は強く訴えたい。

少しばかり「前のめりの発言」だったかも?とすればお許し願いたい。

3．「手賀沼遊歩道周辺に見られる廃棄船・放置船・工作物・構築物等」について

～問題の改善に向けての進展を実感!?～

本件については、私が昨年(2023)3月に「我孫子の文化を守る会」の会議にて初めての問題提起をし、

続いて、同月「美手連・運営委員会」においても同様の提起をした。幸いに同会においてご賛同を得て、「美手連」の今年度(2023)の取り組み事項の一つとして取り上げていただいてのスタートであった。提起した内容は、会報「あびこの文化」第194号2023年7月1日発行)に詳しく紹介させていただいているのでご覧いただきたい。(**写真9**は廃棄船の1例)

写真9

「美手連」に取り上げていただき、2023年5月26日に、所轄の「千葉県柏土木事務所」に美手連会長はじめ関係者と出向き、関係部署幹部他に面談、問題内容を詳細に説明し、理解いただき改善に向けての取り組みをお願いした。

さらにこの問題の進展を図るため、昨年12月21日(木)に、上記の柏土木事務所所長宛て美手連会長名の「要望書」を携行、改めての同所訪問となった。今回も八鍬会長、野口理事、竹内事務局長、半沢運営委員、牧田の5名が、先方の所管部署:(調整課)小川課長、井澤さん(管理課)岩崎課長、岡さん の4方に面談し、問題要旨の再説明・要望を行った。

県側は、前回訪問の5月以降、問題への取り組みに着手しており、終始前向きな姿勢が感じられ、問題改善・解決のための問題・難易度など実行上の問題点の分析も進行中で、従前の反省を述べるとともに意見を求められるなど、「やっている感」は評価できた。

諸事情を考慮しながらの取り組みは、県として、『先ず「廃棄・放置船」対策から、着手開始したい』とし、中でも『ゴミ』と判断される「船」から手を付けていくとの回答を得た。私から、実行にあたり、「不法に投棄している元の突き止め、可能な限りそれらに責任を負わせることを先行すべき」を徹底していただく事と、「期限を区切って、ステップ・バイ・ステップにて」をお願いした。今後の進展を大いに期待したい。

そもそも本来は、「不法投棄などの行為」を、させないような取り組み、「マナーの向上」が先決だと考える。

4.「手賀沼におけるウエイクボードなどの水面利用について

本件も昨年5月「千葉県柏土木事務所」に対策をお願いした内容である。今回の面談上で、両者で認識したことのうち、実態が、モーターボートを利用する「水上スキー」「ウエイクボード」と自走する「水上バイク」の3者に亘った問題であり、その操縦者もが幾つかの大学の学生の活動、個人、その他の団体?に及んでいるは実態がわかっているが、さらに実態把握が必要との見解に落ち着いた。

現在「千葉県柏土木事務所」では、「手賀沼の水面利用実態調査アンケート」を実施中。2024年1月25日締め切りで「団体」や「法人」宛てに調査を進めているとのこと。その実態を、「美手連」も共有したいので、データの提供を依頼した。

「手賀沼の水面利用は、安全性、自然保護などの観点から、また鳥の湖として知られ、山階鳥類研究所、鳥の博物館もあり、鳥を見に来る場所だ。ボートに乗りに来る場所であってほしくない」との考えを美手連として述べたうえ、高速で波を掻き立てるボートは、鳥の生息にも悪影響を及ぼすことを強調した。

今後、上記の実態を把握し速やかに対策を講じる必要がある。また「柏土木事務所」では「ヨシの刈り取り」を試験的に実施し、その繁茂への影響、水質への影響などを調査するとの話もあった。

5.「豊かな手賀沼をめざすデジタル教材づくり事業」について

一昨年度から進められているこの事業は、関係者のご尽力によって、今年度も鋭意制作が進行中である。既に制作され、発表済の作品は、教育機関やその関係者による評価が極めて高く、教育の現場で利用が進んでいるとの報告とともに、今年度作品は以下の内容で進められている。

なお、「我孫子の文化を守る会」の作品は、当会会長の美崎さんの手で制作が進み、完成間近い。

現在制作中の作品一覧)

①我孫子の文化を守る会
「手賀沼に集まった文化人たち」
②我孫子野鳥を守る会
「デジタル紙芝居4作品」有声版
③大津川をきれいにする会
「よみがえれ大津川～ふたたびホタルの里に～」
④大堀川の水辺をきれいにする会
「見守っていこう 私たちの大堀川」
⑤岡発戸・都部の谷津を愛する会
「谷津・生き物たちの小宇宙」
⑥岡発戸・都部の谷津を愛する会
「岡発戸・都部の危ない植物・薬になる植物」
⑦岡発戸・都部の谷津を愛する会
「岡発戸・都部のチョウ写真集」
⑧手賀沼水生生物研究会
「手賀沼の魚と水生生物図鑑」
⑨船戸の森の会
「船戸の森とドングリ」
⑩流山市立博物館友の会
「手賀沼むかしものがたり」改訂版

以上が進められている。

6.その他の活動について

定期的に行っている、手賀沼水質保全協議会関連の調査事業「**手賀沼流域協働調査**」、ならびに我孫子市手賀沼課と美手連が協働で行う「**手賀沼の水の残留農薬分析**」、美手連の独自調査「**都部谷津における特定外来生物(植物)観察**」事業が続けられている。

以上

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

（連載第6回）

《世田谷の頃の原田京平ファミリーを知る・その3の2

空穂先生が、聚文画室に和周を見舞った日のこと―歌の師空穂と和周のたどった道》

平林　清江（会員）

画家・歌人　原田京平とそのファミリーの旧宅跡地
（現　加藤様邸＝Kフラット＝東京都世田谷区桜丘
　四ー九ー三十六）探訪・取材の記

四、師空穂と和周のたどった道

（1）遺歌集「雲の流れ」の序文から見た空穂の短歌観

和周が、「十余年もの間、敬慕の心もて師事」した空穂は、和周が作る歌について、その〈序〉の中で次のように回想している。

原田君の歌は、その悉くが、原田君自身の体から生まれ出たもので、全く他の影響を受けてゐないものである。それはこれ程までに歌を作りながら、殆ど他にみせようとせず、自分で読むことによって満足してゐた永い経歴が物語ってゐる事である。従って原田君の歌の味ひを語るといふ事は、原田君の魂を語ることで、輪郭的な言葉以上には出られない事である。即ち感じても語れないものなのである。
〈序〉

時に、空穂の言葉は、理解するのに困難を伴い、前に進めなくなり立ち止まる事を余儀なくされる。この一節もそうしたものの一つで、筆者もこの言葉の前で足踏みしている。しかし、敢えて語れば、和周の人間及び歌への共感と、早世の和周への哀惜の表現であろうことは理解でき、和周の短歌を語りながら、同時に空穂自身の文学（短歌）観をにじませているとも考えられる。

明治三十四年、空穂二十五歳で、『明星』を離脱した後、「一人の道を歩む」（注16）こととなり、自身の作歌態度を厳しく追求し、また自身に課したのは、「短歌は人生・生活の実感の表現」ということである。空穂は、明治四十年代に自然主義の影響下で、小説に専念したが、その意欲は、大正期に入って小説から離れ『国民文学』（注17）が契機となり、歌人としての再出発が始まっても、人生を直視し、実生活における実感を、短歌形式に取り入れる方向に向かってゆくことになったのである。

（2）誠実な表現は、客観性によって支えられる―空穂の自選歌集「槻の木」について

短歌は、人生・生活の実感から得られる表現である。その表現は、その人の実感から得られるものであるが、また、誠実な表現は客観性によって支えられるということである。短歌が芸術として他人の胸に響く力を持ち、その人の「生涯に一首の秀歌」となるためには、そこに客観性がなければならない、ということである。

誠実な表現としての短歌における客観性について語られたのが、大正十四年十二月に刊行された、空穂の自選歌集「槻の木」の巻末記の最後の一節である。

この巻末記の最後の箇所で、自選歌集「槻の木」発行直前の、空穂の精神の充溢期のもので、空穂の根本的な短歌観と、作歌への熱意と、新たなる決意の表出が読み取れる箇所である。

最後に、作者としての感慨を一言したい。表現はたやすくない。

その人の実感は、その人にして誠実を持ってゐる限り、当然客観性があるべきはずだ。

いづれの歌もそれを孕んだ瞬間に於て、又表現に際して、誠実は持ってゐたと思った。自身としては我慢のできる程度の客観性も持ちえたものと思った。今度自選をする為に自身の旧作を読みかへして見ると、取りえらるる歌が極めて少く、取った歌も殆どすべて我慢の伴ったものである。客観性が足りないのである。比較的現在に近い作で、年令としても四十代に入ってのものである。又この為に費した時も短いとはいへない。不敏を嘆かざるを得ないことである。

古人の生涯に秀歌一首をと願った心も漸く解することが出来て、それと共に新たに熱意の生ずるのを覚える。実は、とくに整理すべくして荏苒してゐた新しい歌集の稿を、慌てて整理したのもこの心に刺激されてである。その歌集は比較的会心のものだと云ったが、それも、かうした事情の下で思ったに過ぎまい。幸に健康が続くならば、私もまた、辿りはじめた道の終りに一首の秀歌を得たいものだと思ふ。

大正十四年十一月　窪田空穂

「槻の木」は、大正十四年十二月に、改造社から刊行（四六版）された空穂の自選歌集である。ここに取られた五〇六首の歌は、それまでに、既に刊行されていた四部の歌集「泉のほとり」（八十首）、「土(あおみな)を眺めて」（百二十二首）、「朴の葉」（百十六首）、「青水沫」（百五十八首）と、歌稿「拾遺」（三十首、のちに「鏡葉」（注18））に収めた作品）とから選ばれたものである。大正五年五月より同十年三月までの五ヶ年間、空穂四十歳から四十五歳へかけてのものである。巻末記の中で、空穂は、四部の歌集のそれぞれに、詠出時の年齢を書き添えている。それは、短歌は実感の表現であり、実感は年齢と密接な関係を持っている。だから、その人の年齢を知ることにより、その人の実感の色合いともいうべきものを、窺い知ることが可能となり、鑑賞の上で便利だという理由からである。

また、「槻の木」は長期にわたり、ひろく読まれた歌集とのことである。今、筆者の手元にある「槻の木」は、昭和四年五月発行の改造文庫本（第二部第六十三篇）四十四版で、昭和十一年一月刊行のものであることからも、そのことが理解される。

（3）歌を詠むことの、苦しみと喜びのバランスシート

① 原田和周の場合　短歌は独り之を楽しむ

「槻の木」は、和周が『白檮(しらがし)』の同人として、空穂に師事し、交流の盛んになった頃の、大正十四年十二月に発行された、空穂の選歌集である。その巻末記に書かれたのが、「短歌は実感の表現であり、客観性があるべき」という一節である。この「槻の木」は長期にわたり、ひろく読まれた歌集で、多くの読者を惹きつけたという。

おそらく、和周も強く刺激され、心に深く刻んだ空穂の言葉であったことと想像される。

そして、歌人としての和周は、この困難な課題を、魂の奥深いところで自らに課し、歌を詠もうとしたのである。師である空穂が辿った、同じこの道を行くことは、喜びと共に苦しみをも伴ったものであったろう。

和周は、歌を詠むことで、純粋な自己(個性)を求め、あるいは歌を詠むその態度において、誠実であろうとしたのだと思われる。自己(個性)とは何か、歌の真実はいかにあるべきか、という命題に真正面から取り組んだと思われる。

しかし、歌を詠むことの苦しみと、また、喜びとは、正に表裏一体のものではないか。そうでなければ、長い間「これ程までに歌を作りながら、殆ど他に見せようとせず、自分で読むことによって満足」(「雲の流れ」序文)など出来るはずがないのである。

何故、和周は、多くの秀歌を作りながらも、友人の割田斧二が歌誌『地上』(第二次　昭和十一年八月)の中で追想したように、「原田君は短歌に対しては謙虚であり、発表もせず、独りノートに記して之を楽しんでゐた」のであろうか。

もう一点、ここに、和周と短歌とのかかわり方について、妻の原田睦が記した(あとがき)の一節を紹介する。

私は今、彼の寂しくも恵まれなかった四十二年の足跡、そして何時も人生の苦しみとたゝかひながらも、常に自然の中にゐて、藝を求めるに切だった彼の、彩管に残されなかった半面を語るところの短歌を読みかへす時、画業の余技として捨てるにしのびないものがある様に思はれる。

歌はかつて、「白檮」や「眞木」に載せたが、近年は二三の雑誌からすゝめて頂いたが発表せず、窪田先生に折ゝ教えを乞ふだけで、今度歌のノートを整理して、私も殆ど初めてみるものが多いのであった。

「雲の流れ」あとがき　から

ここでは、妻睦が、和周と短歌との関わり方について言及しているが、和周は「何時も人生の苦しみとたゝかひながらも、常に自然の中にゐて、藝を求めるに切だった」とのことである。おそらく、画家としてのさまざまの葛藤・苦しみと闘いながら、自身の芸術を求め続けた一生であったと想像される。

そして、その苦しみをやわらげ、究極の喜びをもたらしてくれるものが、短歌を作ることであった。晩年は、雑誌にも発表をせず、師の空穂に折々教えを乞うだけであったようだ。和周逝去後、妻の睦が歌のノートを整理して、初めて見るものが多いのであった。

「原田君は短歌に対しては謙虚であり発表もせず、独りノートに記して之を楽しんでゐた」、という友人の割田斧二の言葉は、真実であったようである。

それ故、妻の睦が和周の短歌ノートを整理せず、遺歌集を刊行しなかったならば、和周の秀歌は完全に埋もれて、やがて、この世から消え去っていたかもしれないのである。歌人としての原田和周を、世に送り出した原田睦の功績は、実に大きいと言わざるを得ない。

では、ここで、和周や他の歌人たちにおける短歌とのかかわり方を、仮に、「短歌を詠むことの苦しみと喜びのバランスシート」と呼び、その「バランスシート」、とでも言うべき事柄について、解き明かした空穂の論説(部分引用)を見てみたいと思う。

『地上』十五年記念会での講演「現代の短歌について」の中で、空穂は「短歌を詠むことの苦しみと喜びのバランスシート」について、次のように解き明かしている。短歌雑誌『地上』(昭和九年六月・「窪田空穂全集」第八巻昭和期)に掲載された講演の内容で、「雲の流れ」の(序)が書かれた時期に近いものでもある。

個性を重んじるといふ事は、現代のあらゆる芸術に通じての事で一人短歌に限っての事ではない。しかし芸術を文芸と限り、文芸を散文と詩とし、短歌を詩の中の一つとしてこれを他の文芸に比較する時は、個人の環境に対しての闘争の過程を、微細に又つまびらかに現すこと、短歌の如きものは他にはない。そしてその点こそ短歌が短歌として拠つて立つてゐるところであり、又将来の可能をも思はせるところであると思はれる。

我々の環境と交渉をとほして心を動かすものは、大部分断片的のものであり、又瞬間的のものである。さうしたものの流れの中に在ってそれと共に流れ行くやうな状態が我々の日常生活である。此の日常生活に於ける印象は、我々の心的状態が安易である場合には、その印象は心の表面で消えて行きそのままに忘れ去って行く。しかし我々の心が緊張を帯びてゐ、生活が意識的になってゐる場合には、その種の印象も心の奥所に達するものとなり、達することによって意味を帯びて来て、その意味は直ちには解決がつかず、一種の懸案の形となって心に留まるのが常である。そして、此の懸案は解決を促すもので、解決はその証明として表現を要求するものである。この解決といふ事は言ひ換へると、環境と一種の闘争をしてそれを征服したといふ事である。これは語としては適切ではないが、心としては必ずしも不当なものとは思はれない。

短歌は読者を予想することの少い上からいへば、殆ど独語に近いものであるが、これを作り得た時の心の喜びは独語をした心に比すべきものではない。のみならず会心の友に語るのにも較べられないものである。普通の本能としての表現欲を満たす喜びといはれてゐるが、さう云っただけでは、喜びの深さをいふに足りない。適切を求めると、本能としての闘争欲が満たされた時にのみ感じられる喜びといふべきものである。作歌の喜びを覚えたほどの人が、い

はゆる功利的の何物のないにも拘らず、これから離れる事ができずにゐるのは、一にこの喜びの為だと思はれる。

やはり、ここでも空穂らしい難解な論説が展開されていて、非常に悩ましいが、あえて、もう少し分かり易い分析・解釈を試みてみたいと思う。

空穂は、この講演の中で、短歌の特に重要な二つのポイントについて、かく論じているのである。一つは、「文芸を散文と詩とし、短歌を詩の中の一つとしてこれを他の文芸に比較する時は、個人の環境に対しての闘争の過程を、微細に又つまびらかに現すこと、短歌の如きものは他にはない」と。

個人の環境との闘争の過程を、事細かく、また、詳しく表現する時は、散文よりも、「定型詩」としての短歌を用いる方が適切であり、優れている。そして、その点こそが短歌が短歌として依って立つところであって、また、短歌の将来性に希望が持てるということである。

二つには、「個人の環境との闘争」ということはいかなる事か、ということであるが、空穂は、次のように解き明かしている。

我々が、われわれの環境との交渉を通して、心が緊張を帯び、一種の懸案の形となって心に留まるが、この懸案は解決を促すものであり、解決はその証明として「表現」を要求する。この解決ということは、言い換えると、環境と一種の闘争をして、それを征服したということである。

環境と闘い、心に血を流し、或いは、命からがら潜りぬけて、そうしてその結果として、自身、納得の出来る短歌を作り得た時の心の喜びは、独語をした心や、会心の友と語る喜びにも較べられないものである。環境との闘争に勝利することは、決して生やさしいことではないのである。

また、その喜びの深さについては、本能としての闘争欲が満たされた時にのみ感じられる喜びというべきものである。ここで言う、「本能としての闘争欲」とは、空穂の解く、「究極の闘争欲」のことであり、それ故に、作歌の喜びを覚えたほどの人が、功利的には何も無いのにもかかわらず、これから離れられないのは、何ものにも換えがたい、この心の喜びの深さを知ってしまったからなのである。短歌を作ることの苦しみと喜びのバランスシートは、まさによく出来ていると言ってよいであろう。

窪田空穂は、この講演「現代の短歌について」の冒頭部分で、昭和初期当時の短歌人口(短歌に関心を持ち、作る事を楽しみとしている人の数)は、少なくとも二十万乃至三十万と推測して、その上でこの説を論じているのである。さらに、その時代の状況については、「今日、この緊張した環境の中に生きている者には事実一人(いちにん)の閑人(ひまじん)もない。現に我々の知っている作歌人で無聊に苦しんでいるというような人は、一人も見出せない。それでいて短歌はこのように隆盛なのである」と。

さて、次に掲げる二人のそれぞれの歌人は、原田和周の場合よりも、より具体的で強い「環境との闘争と征服」の様相を見せていて、分かり易いので、空穂が解くところの、短歌を作り得た心の喜びの深さは、「本能としての闘争欲が満たされる喜び」、ということを理解してもらえるかと思われる。短歌とのかかわり方は、原田和周・宇都野研・小佐野彈氏の三人が、それぞれの特色と違いを呈してはいるが、共通するところは、短歌を作ることで、皆、心が救われるということである。

② 宇都野 研(前出)の場合
闘争の人生、歌のみにて救われる

この人も、和周と同様、空穂の弟子で、師と同年の明治十年の生まれである。その経歴をざっと記しておく。

明治四十年、東京帝国大学医学部卒業後は、同大学病院の助手として勤務していたが、明治四十五年、東京本郷に小児科医院を開き、流行医者としての盛名があったという。『宇都野研年譜』に「明治四十五年、東京市本郷区西片町に自宅開業し大いに流行す」とあり、それ故にあったであろう周囲との軋轢・激しい闘争など、また、不眠症の宇都野の眠れぬ夜の歌なども、歌集『木群』(こむら)には散見される。宇都野は、師の空穂の影響から、長歌を数多く詠んでいる。ここでは、宇都野の晩年、五十九歳の時の長歌〈本質〉にふれてみよう。

「闘争の人の世憂(よう)けく、喰はざれば喰はるゝ思ひ、
傷れ易き心ぞ疼く」

と詠まれ、盛名ある医者としての、周囲との闘争という宿業は、この人の人生に必然的に添うもののようである。だが、小児科医としての幼児も、そして歌作りも、「二つながら溺愛すなり、甲乙を附けかぬるなり思ほえば これ吾が本質の二つのあらはれのみ」と、自身を静観し、医も歌もわがものと、晩年の自己統一に向かう安らかな心境を詠って、内省の味わい深い傑作を残している。師空穂による宇都野評には、「宇都野君は歌作によって人柄を完成に向はしめつつあった人で、その意味では歌によって救はれてゐたと思ふ。作歌は宇都野君には宗教で、本業の医よりも重いもの」というのがある。

なお、この歌人についてのより詳しいデータは、『我孫子の文化四十年の歩み』(『我孫子の文化を守る会』発行 市販図書)収載の、「手賀沼畔居の画家・歌人原田和周(聚文)と、彼が招いた歌人たち」の中に記した。乞参照。

③ 小佐野彈氏の場合
短歌は苦しみを吐き出すアウトプットの手段

最近、小佐野彈氏という現代歌人のコラムに出会った。先に記した空穂の講演の短歌観の意味・解釈が理解出来ず、しばらく迷いのなかにあった頃であった。この歌人のことはよく知らないが、空穂がその講演の中で語った「短歌の役割」と「短歌を作ることの苦しみと喜びのバランスシート」について、氏の実体験を通して書かれてあり、具体的で分かり易い内容なので、ここで取り上げ紹介したいと思う。

現在厄年の小佐野氏が、人生で一番の苦しみの中にあったのは、中学生の頃で、自分の性的指向に気づき、自分がいわゆる「普通」の範疇に入れない人間であるこ

とを自覚したときは絶望した。母親から心をえぐられるような言葉を投げつけられ、家にも学校にも、どこにも救いを見いだせなかった氏を救ってくれたのが、俵万智の歌集「チョコレート革命」であった。この歌集に綴られた言葉の数々は、氏の苦しみに寄り添い、またやわらげてもくれた。

ただ、「チョコレート革命」という一冊の本が氏に授けてくれた最大のものは、短歌という「アウトプット」の手段にほかならなかった。さらに、小佐野氏は、かく言う。もし、あの時出会っていたのが、宗教書や大部な小説だったなら、「よし、自分も書いてみよう」とはならなかっただろう。

平易流暢でありながら、巧みなレトリックが駆使された俵万智の短歌は、氏の苦しみに寄り添ってくれただけでなく、「ほら、あなたも詠ってごらん」と小佐野氏の背中を押してくれ、「アウトプット」へと誘ってくれたのだった。

以来、小佐野氏は自分の苦しみを31音のリズムに乗せて吐き出すようになった。同じ「アウトプット」でも、日記や散文という形の場合、起こった出来事や、苦しみの原因となった言葉を振り返らなければならない。当時の氏にとって、それはあまりに辛すぎる作業であった。日々起こる事実ではなく、心に沸き起こる真実を、定型に載せて歌い上げる。歌集「チョコレート革命」を通じて授けてくれた「短歌定型」というアウトプットのあり方は、氏の苦しみを吐き出す手段として、ドンピシャにハマったのである。

またひと日生き永らへるあなたから
授けられたる杖にすがりて

プロムナード「魔法の杖」小佐野　彈　日経新聞
令和5(2023)年　4月27日　夕刊)から

五、空穂が認めた和周の「人、そして短歌」

和周は、空穂により、「正直で、物を正面からのみ観てゐて、内に熱意は持ってゐるが、落ちついて言葉少なにしてゐる」(〈序〉)と評され、その作歌態度のみならず、その人の誠実さと謙虚さが、共感をもって受け容れられたのである。そのことを言い表しているのが、やはり、「雲の流れ」の〈序〉のなかにある、次の一節であると思われる。

原田君自身は、歌人としての自身を何れ程に思ってゐたかは分からない。多分可なり小さく計算してゐたのであらう。私に示す所の少なかったのも、その為ではなかったか。しかしそれと意識はしなくても、原田君の歌は正に身についたものである。原田君の本質をなしてゐたものである。すぐれたる物を持ってゐて、それと心附かなかったといふ事は、原田君のすぐれてゐた所以である。原田君は一面すぐれた歌人だったのだとも思った。　〈序〉

さて、ここでもう一度、「評伝　窪田空穂」の中の「和周は、昭和十一年一月十六日、満四十歳の若さで病没したが、その死に際し、空穂は親しみと悲しみのまじる心で見舞った」という箇所に立ちかえり、次の〈序〉の部分を読んでみると、空穂先生が和周の「人と短歌」を認めた気持ちが分かるような気がするのである。筆者が「雲の流れ」の〈序〉の中で、最も好きな箇所であり、二人の間に流れる、心地よい交流の様子が描かれているのである。

それにしても此の稍々長い間原田君は、もよりまで来たからといって折々私を訪ねてくれたが、それは程のよい間隔を持って、此方で思ひ出して、顔を見たくなる頃には、必ず玄関におとなってくれるといふ風であった。逢ふと私たちは雑談を楽しんだ。原田君は本来言葉の多くない人であったし、又共通の話題といふものもないので、雑談の範囲は限られてゐたが、その純粋な気分と、芸術家の持つ謙虚な、しかし熱意のある話は、私には魅力のあるものであった。私は原田君と対してゐると、一人でゐるやうな安らかな気分を持って、程のよい昂奮を味ふ事が出来たのであった。　〈序〉

【注釈】

(注16)「一人の道を歩む」：関連の記事2点を紹介する。

その1

空穂は、中学時代に文学に憧れをいだき、坪内逍遙を慕って早稲田の学生となり、逍遙を生涯の恩人の一人とした。北村透谷、島崎藤村、国木田独歩など詩人系統の新しい文学に感化、影響を受け、明治三十三年(二十四歳)与謝野寛の新詩社に加入、雑誌「明星」に創刊号から短歌を発表するが、一年間で退社、その後は一人の道を歩むこととなる。しかし作歌の初期に師と呼ぶ人があれば寛であるとみずから記しとどめている。この二十代には、短歌と新体詩とを作り、『まひる野』(明治三八刊)はこの二つを半々に収めているのでも明らかである。その後、詩からは離れ、大正期に入ってからは詩のかわりに長歌を詠むことが多くなり、近代の歌人としては希な存在となるが、量的にも短歌が主流であるのは言うをまたない。

第一歌集『まひる野』刊行後、明治四十年代には詩歌よりも小説に専念し、短編小説集『炉辺』(明治四四)を刊行した。空穂本来の文学的資性と、当時文壇の主流となる自然主義文学とに一致するところがあったためである。しかし大正期に入ると小説からも離れ、歌人としての新しい再出発がはじまる。大正四年刊行の「濁れる川」は明治末年からの短歌を編んだ第四歌集(それまでに「明暗」「空穂歌集」がある)で、自然主義文学の大きい波をくぐり、それを身につけ、人生を直視する振幅の大きい抒情詩になる。はやく「まひる野」にその芽を持ち、「明星」から離れるのもそのためであった一筋の流れが、ここで明確になったということができる。そして、この歌人の生涯をつらぬく歌風の根幹となったと考えられる。

歌集はこの後、最後の「清明の節」(昭和四二刊)に及ぶまで二十三冊がある。

「窪田空穂の短歌」(窪田章一郎著　平成八年六月八日発行　短歌新聞社から)

その2

平出修(ひらいで　しゅう)と『新派和歌評論』概説

『新派和歌評論』の著者黒瞳子とは、明治四十三年の大逆事件に弁護士として深くかかわり、また、その事件を題材に小説『計画』・『逆徒』などを書いた作家として、日本近代史にその名を留める平出修のことである。

明治から大正初期を疾駆の後早世した「理智の人」平出が、明治三十四年『新派和歌評論』を刊行した目的は、歌論家として与謝野鉄幹・晶子の作品を称揚し、旧派和歌との決別を企図、近代和歌史の奔流の中で、新しい時代の歌を牽引することにあった。

本著において、平出は鉄幹・晶子の他にも、多くの歌人とその和歌を紹介している。それは、新しい時代の歌を集めた「新派歌人曼荼羅図」であり、その曼荼羅図を内包した和歌の宇宙空間の体を成している。それ故、われら読者はこの宇宙にて、「やは肌の」や「髪五尺」などの歌の魔力に酔いながら、平出の胸のすくような語り口と、明快な評論を楽しむことが出来る。

しかし、同時に窪田通治(空穂)の新詩社離脱と、子規の重病のさなかで、近代和歌の未来を模索する、平出の孤独な苦悩をも知ることになるのである。また、実作の人としての平出は、多くの作品を『明星』や『スバル』に発表したが、晶子に傾倒しその生涯かけて、晶子ばりの歌を詠み続けたのは何故であろうか。晶子という天性(天然)の歌人の歌を潜りながらも、「理智の人」平出が、ついに持ち得なかった強靭な歌の根源の力を、わが物とする闘いであったように思われてならない。

わたしの一冊『新派和歌評論』(黒瞳子著　鳴皐書院実際の引用資料としては「平出修集」から)

世田谷文学館友の会会報　第52号　平成29年12月19日発行掲載　平林清江

(注17)『国民文学』:大正三年六月、窪田空穂が創刊。国民文学社発行。始め文芸・美術に関する月刊雑誌として出発、大正四年一月からは、会員組織の短歌雑誌としたが、大正六年頃までは、文芸雑誌の名残がしばらく続いた。

〈創刊号発刊の辞〉には、次のように書かれている。

「国民文学」と題して、文芸、美術に関する月刊雑誌を、我等の手によって新たに発行することとなった。我が国の文芸、美術をして、より強い国民的光輝を帯びたるものとならせたいといふ願ひは、我等も多くの人と同じく抱いてゐる。「国民文学」は此の願ひを願ひとしている。さうした文芸、美術の芽生えて成長して行く為に、土壌を耕す一つのものとなりたい、雑草をぬくものとなりたいと思ってゐる。土壌を豊かにするといふだけでも、其所には数〈難いまでの多くの問題を含んでゐる。我等はその営養を横に広くもとめなければならないと同時に、縦に古くももとめることを忘れてはならない。我等は一切の土台であるところの此の国土を何時も念としようと思ってゐる。国民文学同人」。

内容としては、研究欄・創作欄・批評欄・雑録欄がある。研究欄には、田山花袋の「明治文学に於ける二葉亭四迷の位置」、藤懸静也の「浮世絵の生まれ来った背景」、空穂の「清少納言論」などがある。大正四年一月から投稿歌を中止し、十月会会員中心の会員組織の短歌雑誌としたが、大正六年頃までは、諸家の小説などの寄稿がある。空穂も小説「養子」を連載して、文芸雑誌の名残りがしばらく続いた。花袋・秋聲・葉舟・露風・晁らが創刊号に執筆している。

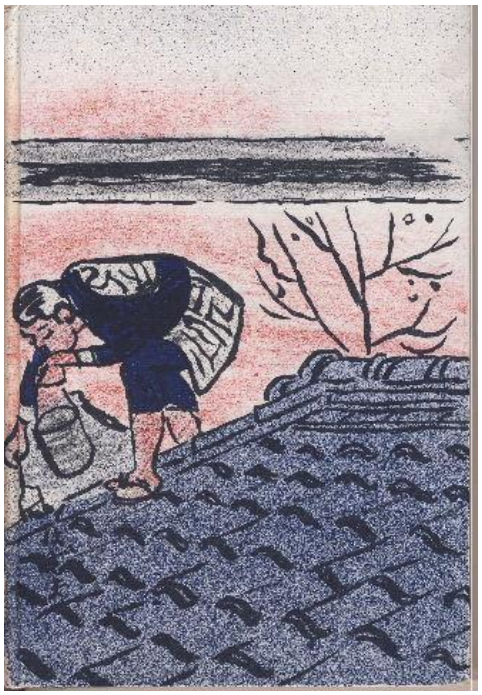
『国民文学』創刊号(国立国会図書館蔵)、「日本近代文学大事典」第五巻(日本近代文学館編昭和五十年十一月発行　講談社)

(注18)「鏡葉(かがみば)」:空穂の第十歌集。大正十年春から同十四年冬まで、空穂四十五歳から四十九歳まで四年間の作、長歌三十八首、短歌七〇三首、旋頭歌二首を収め、大正十五年・昭和元年三月五日、紅玉堂から刊行。平福百穂の装幀。「窪田空穂全集」第二巻　歌集Ⅱに収載。「鏡葉」には、生活を題材にしたすぐれた長歌がおさめられていて(本稿注13参照)空穂の作品の「一高峰をなすもの」と言われている。

空穂が持続的に長歌創作を試みた時期は、大正六年から昭和二十八年頃までであるが、この時期は空穂の気力の盛んで充実した時期とされている。

なお、鏡葉とは、椿の葉などのように、表面がつやつやと光っている葉のことを言うそうである。

原田和周の遺歌集「雲の流れ」
(右…裏表紙、左…表表紙)



あとがき

私ごとで恐縮ですが、本稿の「はじめに」では、窪田空穂の「境涯派」と「浪漫派」との違いについて、知ってい

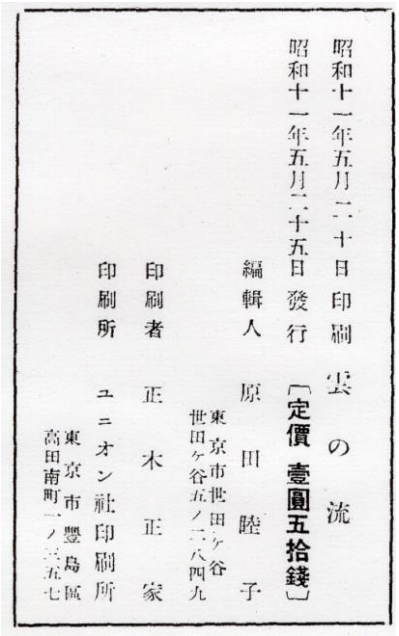
ただけるよう記したものですが、いささか長くなってしまいましたので、「あとがき」はこれくらいにしておきます。

いつの日か、お世話になりました皆様と共に、「世田谷の頃の原田京平ファミリー」について、楽しく語り合うことが出来ますことを心から祈念しております。皆様どうか、その日までくれぐれもお大切に、お健やかにおすごしください。誠にありがとうございました。

コロナ禍第三波のただ中で、再会が叶いますよう願いつつ。

令和三年(二〇二一年)一月吉日

旧原田京平宅の住所が判明した奥付



昭和十一年五月二十日印刷　雲の流
昭和十一年五月二十五日發行　〔定價　壹圓五拾錢〕
編輯人　原田睦子　東京市世田ヶ谷　世田ヶ谷五ノ一八四九
印刷者　正木正家
印刷所　ユニオン社印刷所　東京市豐島區　高田南町一ノ三五七

放談くらぶ報告
『「柳宗悦と兼子」～二人の個性はどこ迄もどこ迄も活きねばなりません～』に参加して

芦崎　敬己(会員)

一二月一七日(日)我孫子北近隣センター並木本館で開催された当会の放談くらぶ『「柳宗悦と兼子」～二人の個性はどこ迄もどこ迄も活きねばなりません～』に参加しました。

当日は、晴れていましたが、寒い日でした。会場は、声楽の母と呼ばれる柳兼子のアルトの唄声がテープで流れて盛り上げていました。講演が始まる頃には会場の参加者は、空き席が無くなり二八名が参加しました。

講師の竹下賢治氏は、学校の教員をしていた方で、退職後に白樺文学館に通い続けているうちに、文学館で仕事をすることになった方です。当会には、以前に一度、講演をされたことがある方です。

講演のタイトルにある「二人の個性はどこ迄もどこ迄も活きねばなりません」は、柳が兼子に宛て出した二七〇通のラブレターの中の一節で、竹下氏は感銘を受けた言葉とのことでした。

二人の生い立ち

この後二人は、理想の愛を貫いて結婚しますが、講演は二人がどのような家庭環境で育ったのか言及していきます。

柳宗悦(やなぎむねよし)は、一八八九(明治二二)年、東京麻布市兵衛町に父柳楢悦(ならよし・**下写真**)母勝子(かつこ)の三男として生まれました。父は貴族院議員で海軍少将でした。更に、日本における海洋測量の第一人者としても知られています。

母は、近代柔道を創設し、貴族院議員で、日本のオリンピック参加を推進した、高等師範学校・東京高等師範学校の校長を務めた教育者、嘉納治五郎(かのうじごろう・**下写真**)氏の姉です。しかし、父の楢悦は、宗悦が二歳になる前にインフルエンザで亡くなり、以後母に育てられました。柳の家系は、漁船に内燃機関を取り付けるなどして日本の近代化をリードする殖産事業の家系と位置付けられています。

尚、嘉納治五郎氏の銅像は、令和二(二〇二〇)年四月に、当会の主導で、多くの市民や団体の協力の下、我孫子市緑の天神山に建立されたのは周知のとおりです。

一方、兼子は、一八八九二(明治二五)年に、東京本所で父中島兼吉、母屋寿の長女として生まれました。家業は、鉄工所を営む物づくりの家系でした。鉄工所は厩橋東辺りにあり、後にライオン油脂があった場所で、現在の墨田区横網町のようです。

出会いと結婚まで

宗悦は、学習院初等学科から中等学科に進学し、一九〇四(明治三四)年、日露戦争に対して初めは讃えていましたが、翌年「この度の大捷(大勝利)、果たして国家の幸福とや云うべき」などと反戦の意識を持つようになり、個として目覚め、白樺派の個性尊重に繋がって来る萌芽が見られます。

兼子は、「病気の問屋さん」と呼ばれ、数カ月遅れで東京市江東尋常小学校(現墨田区立両国小学校)に入学しましたが、唱歌に親しむ面があり、下町女性の嗜みとして長唄の稽古を始めました。

その後、府立第一高等女学校に入学し、お茶・生け花などのお稽古事を行い、描いた菊の墨絵で一時期画家を目指しましたが、父から「声楽なら男と対等にいける」との教えで、声楽家志望へと変更しました。

女学校を三年で終了し、東京音楽学校予科に入学、日本初のオペラ歌手三浦環らに学びます。この頃、一六歳で長唄の名取にもなりました。その後兼子は、本科(現東京芸大)に進み、声楽を専攻します。この受験の際に、声を良く出す為にナメクジを呑んだ「ナメクジ事件」のエピソードがありました。今では考えられないことです。

宗悦は、恩賜の銀時計を贈られて学習院高等学科を卒業し、志賀・武者小路・里見弴らと準備を進めた『白樺』を創刊します。

宗悦は、ドイツ語教授の田村寛貞(ひろさだ)宅で中島兼子と知り会います。

その後、一九一〇(明治四三)年九月に東京帝大哲学科に入学しました。

知り会って以降、田村宅でしばしば歌う兼子は、宗悦とよく逢いました。しかしこの頃、宗悦は民藝運動に拍車を掛けていきます。並行して兼子への想いを一層強めて行きます。市電の中でのデートや友人の名を使って手紙を出すなど、二人の交際は今日のような自由な状況とは違い、かなり窮屈だったようでした。

この頃兼子は、東京音楽学校学友会演奏会で初舞台を踏み、ロッシーニ歌劇、ヘンデル歌劇で本邦初演、独唱などで活躍し、本科を優等で卒業、卒演で独唱しました。

一九一二(明治四五・大正元)年、兼子への愛が益々募り、宗悦は母を介して中島家に縁談を申し出ました。初めは両家の家族から反対されたと言います。しかし、この頃、「白樺」に芸術論を寄稿し、イギリスの宗教画家ウィリアム・ブレイク(一七五七年?一八二七年)に関心を持った宗悦は、ブレイクが提唱する『二元的一元論』に傾倒して、ブレイクの理解が更に進むと共に兼子への愛を深めて行きました。

そして副題になっている「二人の個性はどこ迄もどこ迄も活きねばなりません」のブレイクの言葉に繋がるものとして宗悦は、『どうか女性としての使命を私に於て全うして下さい。同時に自分は、藝術家としての貴方の使命を全うする事に、出来得る限りの力を尽くす覚悟でいます。』と言い、一九一三(大正二)年四月に婚約しました。

その後東京帝国大学を卒業し、麻布市兵衛町(現港区六本木一丁目辺り)から青山原宿に転居し、一九一四(大正三)年に結婚しました。兼子が言うことには、結婚の決め手はお産婆さんだと言います。自分が母のお腹にいるときに『妊娠です』と母に告げ、そのお産婆さんが柳の兄弟を皆取り上げたことに不思議な縁を感じ、嫁にいっても良いとなり、皆が賛成したと言います。

結婚から我孫子時代

新婚当時、青山原宿に転居した家屋は、「十五夜お月さん」や「赤い靴」「七つの子」などの童謡作曲家の本居長世(もとおり ながよ)がいた家で、グランドピアノを置いて行ってくれました。

当時、出入りの植木屋が兼子の発声練習を見て「変な物を叩いて、変な声を出している。本当にお気の毒に」と言い、ピアノの前で鼻に響かせる西洋唱法の発声練習を揶揄したエピソードがあります。

講演にはありませんでしたが、本居長世は一九一五(大正四)年に脳溢血の後遺症で右手指に障害が残り、(ウェキペディア)ピアノを断念したのかも知れません。

二人の生活は、夫婦喧嘩が日常茶飯事で絶え間なくあったと言います。その時は、互いに口も利かなくなったようです。最後は兼子がいつも負けていて、「こんなに怖い人ではないと思ってお嫁に行ったのに」と愚痴を漏らしています。それは、宗悦の山の手育ちと、兼子の下町育ちの違いが厳然としてあるからと語っています。

一九一四(大正三)年九月、二人は、我孫子に転居しました。そこは、柳楢悦の二女の柳直枝子(すえこ)が海軍大佐(後に大将)の谷口尚真(たにぐちなおみ)と結婚して空き家になった三樹荘(嘉納が命名)です。隣地には嘉納治五郎が別荘と白山には農園を構えていた縁で呼んだと言われています。

我孫子時代の生活は、宗悦にとっては、思索と執筆の場でした。ブレイクの研究は頂点を極めて行きました。この頃我孫子に転居した志賀直哉と親交を深め、一九一六(大正五)年には最初の訪朝をしました。

しかし、兼子にとっては、まさに生活の場でした。一九一五(大正四)年に長男の宗理(むねみち)が、一九一七(大正六)年には二男の宗玄(むねもと)が生まれ、やんちゃな時期を送りました。

一方で、実家の鉄工場の倒産、母の死去など大きな波乱はありましたが、帝劇オペラの解散公演に出演、宗悦に促されて白樺美術館募金の為の演奏活動を国内四ケ所で精力的に行っています。

一九一九(大正八)年三月一日、日本統治時代の朝鮮で発生した大日本帝国からの独立運動(三・一運動)に呼応して、翌年宗悦は兼子・リーチを伴い訪朝しました。現地で講演会と音楽会を開催し、兼子の音楽会は朝鮮発の西洋独唱会として喝采を浴びました。

一九二一(大正十)年、宗悦はこの間知り会った浅川巧・伯教と共に、「朝鮮民族美術館」設立計画を発表しました。計画を実行するために兼子は募金独演会を朝鮮各地・国内各地で開催します。

朝鮮民族擁護論を展開する宗悦を見張る為に私服刑事(角袖)が三樹荘周辺に常時四・五人張り付いたそうです。

こんにち、刑事を「デカ」と呼ぶのは、私服刑事が着ていた着物が角袖(カクソデ)で、最初と最後の文字を逆さにして、省略したのが語源とのこと。ちょっとした豆知識を講師から学びました。

我孫子を離れて

兼子の言葉に「(我孫子には)やの付くものが無い」、魚や、肉やが無く、これらを買いに週一回は東京(上野)に出掛けていた」とのことで相当苦労もあったようでした。

一九二一(大正十)年三月、東京市赤坂区高樹町に転居します。

その後、一九二五(大正一四)年、京都市上京区に転居します。

この間も、一九二二(大正一一)年に三男宗法が誕生(三日後に死去)、翌年は長兄悦多が死去、一九二七(昭和二)年は、四男宗民が誕生しています。

兼子は、一九二八(昭和三)年、四月からシベリア鉄道で半月掛かって、ドイツに一二月まで留学します。ベルリンでのリサイタルではドイツ人を驚かせるほどの日本最高のリート歌手でした。朝鮮での演奏会で得た収入は、宗悦に送金していました。

職業歌手と家庭人の両方で時間的余裕が殆んどな

く、高額な陶器を購入する宗悦に対し家計を一人で遣り繰りしていました。

その後一九三三(昭和八)年に東京市小石川に転居し、宗悦は『日本民藝協会』の設立を発表、「工藝」を発刊し、会長に就任します。一九三五(昭和一〇)年、目黒区駒場に転居し、翌年「日本民芸館」の初代館長に就任し、各地で民藝調査を行い蒐集の旅に回ります。

戦時下は、民芸館の菜園で兼子は野菜を作り、一角に花も植えました。

しかし一九四五(昭和二〇)年三月、民芸館は臨時閉館し、その後に館品は疎開、陶器は土中に埋蔵し、展示品を守りました。

兼子は慰問演奏会で各地を回っています。

戦後、宗悦は疲労で一時期体調を崩しましたが、生涯に渡り日本全国に民藝調査と蒐集の旅、執筆と講演の活動を続けます。

一九六一(昭和三六)年五月、宗悦は脳出血のため逝去しました。七二歳でした。

戦後の兼子も生涯に渡り自主リサイタル、独唱会などの音楽活動を八七歳まで続けました。宗悦の死去後は、民芸館を出て三鷹、そして町田市の宗理宅に身を寄せました。

一九八四(昭和五九)年六月、兼子は心不全の為に逝去しました。九二歳でした。

講演は、「終わりに」として、宗悦の思想が平和思想・非戦(反戦)思想に繋がるものとして、『野に咲く多くの異なる花は野の美を傷めるであろうか。互いは互いを助けて世界を単調から複合の美に彩るのである。』と示して、『二元的一元論』を分かり易く紹介しています。

参加者との質疑応答

熱のこもった講演が終わり、会場参加者から二つの質問がありました。二つ掲載します。

質問1: こんにち「白樺派カレー」がありますが、二人の結婚生活の中で「カレー」に関するエピソードはありますか。

回答:白樺派カレーについては、宗悦ではなく、バーナード・リーチが関係しています。兼子は皆に食事を作るので週に一回東京へ行って、色々な物を買い込んでました。リーチは、週に四回柳邸に来ていましたから、味噌(大豆)を入れる提案をして、リーチとの共同でルーを作ったようです。

質問2: サブテーマにある『二人の個性はどこ迄もどこ迄も活きねばなりません』の部分をレジュメに『二人が最後まで連れ添うことができたのは、三年間の恋愛時代とラブレター二七〇通以上の手紙のなせる業に違いない』と日本民芸館の石丸重尚氏の言葉を引用していますが、竹下講師のお考えをお聞かせください。兼子は、家庭生活の重荷を背負っている訳ですが、その点の宗悦の理解の度合いは如何でしたか。

回答:それは、ブレイクの考え方が出ていると思います。「二元的一元論」の理想を追い続け、白樺派の根源である個性尊重の表れかと思います。実生活に対する理解は余り無かったかも知れません。

そして二人に対する私の感想

兼子の言葉として、レジュメの後半で、

『歌と家庭の両立、それは戦いですね。家庭の他に何かやろうと思ったら神経も使うし、訓練もいります。家の用を完全にしようと思ったら、それだけで精一杯です。時々ああいやだ、と思う時もありましたけど、負けちゃならない、そう思って立ち直りましたね』と実に現実的に語っています。

一方で、宗悦の思想を『二元的一元論』として捉え、著書『美の法典』から

『仏の国に於ては好(美)と醜の二がないのである。現世は二元の国である。善と悪、富と貧が対立することによって絶えざる闘争や戦争が繰り返される。無上に美しいものは、美とか醜とかいう二元から解放されたものである。それ故自由の美しさとでも云おうか。自由になることなくして真の美の美しさはない。』とレジュメで語っています。兼子の捉え方と比べて、私にはどこか観念的だと思えます。兼子の『無上に美しい』とは、個々人の感性によって異なるものではないでしょうか。

宗悦がブレイクの影響を受けて、兼子に、『女性としての使命の全う』と『芸術家としての貴方の使命の全う』を『出来得る限りの力を尽くす覚悟でいる』と言った言葉は、宗悦が兼子に家庭人と芸術家の両方において完璧を求め重荷を与えたと、長男の宗理の言葉のとおり私も賛成しています。

男性の多くには、何処か家庭生活で現実と向き合う時に、問題から逃げている点があるように思う。残念ながら宗悦にも現実問題から逃避する一面があるように感じられた。かくいう私も、同じ穴の狢なんだろうが。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

(プロジェクト報告)

百人一首を楽しむ会(番外)

美崎　大洋

今月の歌(恋の歌その(26)

長からむ　心も知らず　黒髪の
乱れて今朝は　ものをこそ思へ　(80)

【現代語訳】

(昨夜契りを結んだ)あなたは、末永く心変わりはしないとおっしゃいましたが、どこまでが本心か心をはかりかねて、お別れした今朝はこの黒髪のように心乱れて、いろいろ物思いにふけってしまうのです。

【語句】

【長からむ心】末永く変わらない(相手の男の)心の意味。「む」は推量の助動詞。「長し」と後の「乱れて」は「黒髪」の縁語。**【知らず】**「ず」は打消の助動詞の連用形で、「(相手の心を)はかりかねて」というような意味。**【黒髪の乱れて】**「黒髪が寝乱れて」という意味だが、下の「今朝はものをこそ思へ」にも続いて「心が乱れて」という2重の意味になる。**【今朝は】**そのまま「今朝は」という意味だが、男女が共に寝た翌朝、すなわち「後朝(きぬぎぬ)」であることを表す。**【ものをこそ思へ】**「こそ」は強意の係助詞で「思へ」は四段活用動詞「思ふ」の已然形。「こそ〜思へ」で係結びになっている。

【作者】

待賢門院堀河(たいけんもんいんのほりかわ、生没年不詳)は、平安時代後期の歌人。この女房名の前に**前斎院六条**(さきのさいいんのろくじょう)と呼ばれていた一時期もある。女房三十六歌仙・中古六歌仙の一人。父は神祇伯 源顕仲。姉妹に、顕仲卿女(重通妾)[*1]、大夫典侍、上西門院兵衛がいる。

白河院皇女で斎院を退いた二条大宮令子内親王に出仕、**六条**と呼ばれた。後に鳥羽天皇の中宮・待賢門院藤原璋子に出仕し、**堀河**と呼ばれるようになった。康治元年(1142年)、主人・璋子の落飾に従い、同僚の待賢門院中納言と共に出家している。少なくとも一度は結婚したらしいが、夫とは死別。『金葉和歌集』以降の勅撰集、歌合等の他、家集『待賢門院堀河集』にも作品を残している。

関連狂歌など

二宵にすはんと思ふ地玉子の
　みだれてけさはものをこそおもへ

「二宵」は二日酔い。「地玉子」は
　産み立ての卵。

新枕心もしらず黒髪の
　みだれて今朝は物も言はれず

明日咲くと思ふ朝顔夜嵐に
　乱れて今朝は物をこそ思へ

乱れて今朝は御機嫌と御ぐしあげ

逸話(西行との交流)

康治元年(1142 年)のこと、仕えていた待賢門院璋子が仏門に入ると、堀河も同僚の女房たちとともに出家します。璋子は三年後に亡くなり、悲しむ堀河に西行(八十六)はこのような歌を届けています。

《詞書》

待賢門院かくれさせおはしましける御あとに人々またの年の御はてまで候はれけるに南面の花散りけるころ 堀河の局のもとへ申しおくりける

尋ぬとも風のつてにも聞かじかし
　花と散りにし君が行方を(山家集 中)

(尋ねたけれど風の便りにも聞くことができませんでした花のように散ったあのお方の行方を)

堀河の返歌

吹く風の行方しらするものならば
　花と散るにもおくれざらまし(山家集 中)

(吹く風が行方を知らせるのなら(ご主人が)花のように散る後を追ったことでしょうに)

詞書の「またの年の御はて」は翌年の喪の明ける時を指します。西行の歌集『山家集』には、ほかにも堀河との歌のやりとりが記されており、出家後しばらくは交流があったことがわかります。

今月の歌(恋の歌その(27)

夜もすがら　もの思ふ頃は　明けやらで
**　ねやのひまさへ　つれなかりけり　(85**

【現代語訳】

(いとしい人を想って)夜通しもの思いに沈むこの頃、夜がなかなか明けないので、(いつまでも明け方の光が射し込まない)寝室の隙間さえも、つれなく冷たいものに思えるのだよ。

【語句】

【夜もすがら】副詞で「夜通し」とか「一晩中」という意味。【もの思ふ頃は】「もの思ふ」は、恋歌によく出てくるが、つれない人を想って思い悩むという意味。「頃は」には「この頃」とか「夜ごと夜ごと」という意味があるので、全体で「毎晩つれない人のことを想って」という意味になる。【明けやらで】「夜が明けきらないで」の意味。下二段動詞「明く」の連用形「明け」に、補助動詞で「すっかり～し終える」という意味の「やる」の未然形がつき、さらに打消しの接続助詞「で」が結びついたもの。【ねやのひまさへ】「ねや(閨)」は「寝室」のことで、「ひま」は「隙間」を意味する。「さへ」は「～でさえ」のことで、ここでは「つれない想い人だけでなく寝室の隙間さえもが」という意味となる。【つれなかりけり】「冷たい」とか「無情だ」とかいう意味で、現代語とそう変わらない。「つれなし」という形容詞の連用形に、詠嘆の助動詞「けり」がついた形。

【作者】

俊恵(しゅんえ、永久元年(1113) - 建久2年(1191)頃?)は、平安時代末期の僧・歌人。父は源俊頼。母は橘敦隆の娘。早くに東大寺の僧となり、俊恵法師とも呼ばれる。

十七歳のときに父と死別してから、約二十年もの間、作歌活動から遠ざかっていた。現在、俊恵作と伝えられている歌は千百首あまりであるが、その多くは四十歳以降に詠まれたものである。白川の自坊を「歌林苑」と名付け、そこに藤原清輔・源頼政・殷富門院大輔など多くの歌人を集めてさかんに歌会・歌合を開催し、衰えつつあった当時の歌壇に大きな刺激を与えた。鴨長明の師で、その歌論は『無名抄』などにもみえる。風景と心情が重なり合った象徴的な美の世界や、余情を重んじて、多くを語らない中世的なもの静かさが漂う世界を、和歌のうえで表現しようとした。同じく幽玄の美を著そうとした藤原俊成とは異なる幽玄を確立したといえる。

関連狂歌など

夜もすがら物思ふ頃は明けやらで
　あらうものなら世界くらやみ

傾城にふられ煙草の火は消えて
　閨のひまさへつれなかりけり

物思ふころや隣の餅の音

参考文献）
淡光ムック　百人一首入門　有吉保・神作光一　監修
（淡光社）
インターネット百人一首各種投稿文

あびこだより１１０号

演題「稲村雑談―我孫子の文化を守る会へ―」

稲村　隆

概要

この度はお話をさせていただく機会を賜り誠にありがとうございます。

会報『あびこの文化』187、188、190、191号（令和4年5月～令和5年1月）と連載させていただいた「稲村雑談寄稿―我孫子の文化を守る会へ―」を踏まえた話が出来ればと思います。

是非会報バックナンバーをお読みいただいてからご参加いただければと思います。以下連載からの引用です。

タイトルにした「稲村雑談」は志賀直哉（1883～1971）が熱海在住期（1948．1～1955．5）に広津和郎らと雑談した速記をもとにしたものである。生まれてから雑談が行われた1948（昭和23）年までの人生を振り返り、「祖父」「尾ノ道」「我孫子」など18項目から構成されている。冒頭、志賀は次のように述べている。

「このとりとめのない雑談は昭和二十三年五月十四日と、その後もう一度、熱海稲村の今私が住んでゐる家で、話の引き出し役をしてくれた広津和郎君その他二人を対手に話した

私の雑談の速記で、或る所は更に書き加へ、又、前に一度書いた事、或るひは余り面白くない所は除いたりしたものである。気軽に読流して貰らへれば幸である。」

（「稲村雑談」『志賀直哉全集』第8巻1999年、岩波書店149p）

何のために資料を集めるのか、何が我孫子にとって重要な資料なのか。それらをどのように活用することが求められているのか、すべては我孫子の文化をどう考えるかということなのではないだろうか。結局は、文学館そのものをどう考えるかということである。またそれは我孫子の近代史、現代史をどのように位置付け、理解するのかということにつながってくる。私はそういう意味で、我孫子にとっての白樺派、我孫子にとっての白樺文学館というのを考え続けてきたのである。「我孫子の文化を守る会」の皆様はどう考えるのだろうか。

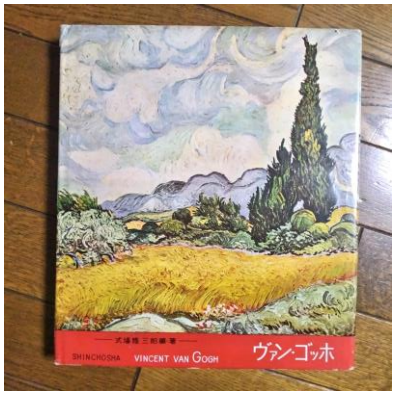
「放談くらぶ」で稲村氏が講演
日時　2月24日（土）14時～16時
会場　市民プラザ会議室―1
演題　「稲村雑談―我孫子の文化を守る会へ―」

「式場隆三郎の「炎の人 ゴッホ」研究」

美崎　大洋

「式場隆三郎展」が白樺文学館で開催された（前期；令和5年7月15日（土）から10月9日。後期：10月17日（火）から令和6年1月14日）。そのチラシに「ゴッホと山下清を日本中に知らしめた精神科医・文筆家・実業家の式場隆三郎。彼は我孫子で出会った柳宗悦が率いた民藝運動から多大な影響を受け、多彩な仕事を通して愛情豊かな自立と共生に社会建設に邁進しました。」とある。市川の式場病院の多大な協力もあったようで、会場の文学館内には式場病院からの貴重な本や資料が所狭しと飾られ、展示期間中、式場の医療・文学・美術など多彩な活動実績を紹介された。

式場隆三郎と我孫子の関係については以前から我孫子の人にもっと知って貰いたいと思っていたので、この展示会は「我が意を得たり」という思いだった。大正九年の医学専門学校時代、式場は吉田璋也（新潟医学専門学校で式場と同級、共に文芸活動も）らと我孫子の柳宗悦宅を訪ねており、その日、柳宅に宿泊したことがある。後に式場が病院を建設しようと考えた際には我孫子は第二の候補地にあがった。柳宗悦らが提唱した「民藝運動」で式場が果たした役割について多くは表面に顕れなかったが、非常に大きかったと評価できる。「民藝運動は柳宗悦」とあまりに声高にPRされる度に、事情を知る式場ファンは「式場も頑張ったよ」と思うのではないだろうか？



昭和三十年代に始まった日本の高度経済成長時期、美術本などの出版が相次ぎ、家庭の応接間の書架に世界美術全集などの豪華本がこれ見よがしに飾られた。

我が家でも例外ではなかった。

今回、久しぶりに当時の西洋美術画集の一冊を取り出してみると発行日は昭和四十六年と印刷されている。監修を見ると梅原隆三郎（画家）、谷川徹三（哲学者）、富永惣一（美術評論家）など、誰でも知っている名前が載っている。それらの画集に混じって『ヴァン・ゴッホ』（昭和二十九年発行）の本が並んでいる。この本も、当然、美術史家や美術評論家が編集または監修したものと、つい最近まで思っていたが、改めて奥付を見てみると著者は式場隆三郎となっているではないか。

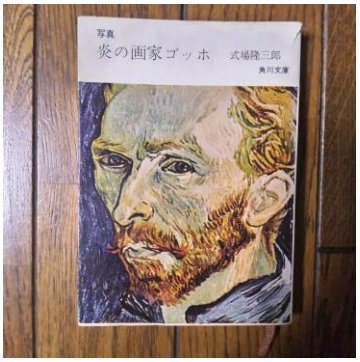
式場龍三郎の経歴

式場については精神科医としての活動とは別に「文化・芸術への深い理解と愛情」という面で語られることが多い。

式場隆三郎は明治三十一年七月二日、新潟県中蒲原郡五泉町で小学校教師の父幸平と、母タニの間に生まれた。県立村松中学校に入学した頃から、伯父式場麻青の影響で文芸の世界に憧れ、早くから雑誌『ホトトギス』などを愛読し、在学中は文芸同人雑誌や中学校の交友会雑誌を編集発行するなどした。さらに大正六年頃から『白樺』を愛読していた。大正十年に新潟医学専門学校（現在の新潟大学医学部）を卒業して医師（昭和四年医学博士）になるのだが、精神科医になった理由として次のように書いている。「学校を出て精神科の医局へ入るとき、両親や友人達の反対を受けた。何を好んでそんな科を択ぶのか。医者らしくもない。（中略）併し　医者らしくないのが私の希望だった。文学青年の夢の未だ醒め切っていなかった当時の私には、医者の中で文学や心理学に関係のあるのは精神科よりほかはないと思った。」「狂人と暮らして」『妄談神経』（昭和十一年）

ゴッホに関する著作

昨年六月に行った当会の「放談くらぶ」での「「民藝運動」と式場隆三郎」講演準備のため集めた式場隆三郎関係の資料・本の中に「写真　炎の画家ゴッホ」式場隆三郎（角川文庫（昭和四十年二月二十八日）が手元にある。その「あとがき」に「これは私のゴッホに関する文献の第五十一番目の著作である。昭和七年四月から昭和三十五年六月までの三十数年間に。私はゴッホに関する著作翻訳、画集その他数々のものを発表してきた。こんどの本は写真入りの文庫で、伝記、資料、作品集をかねるものである。（後略）」（一九六四年八月三十一日朝）



追記　十月に帰国したが胃潰瘍になって十二月順天堂病院へ入院し、床の中での校正にざっと目を通した。主として校正をやってくれた弟俊三の協力を謝す。（一月十七日午後）

式場は順天堂病院を昭和四十年三月に退院したが、十一月に再入院し同月二十一日に永眠した。

式場は生涯で二百冊以上の著作を残したが、その中でもゴッホに関する著作は五十一冊に及び、その執着振りは群を抜いている。先に紹介した文庫本はゴッホに関する最後（五十一冊目）の著作ということになる。

彼のゴッホに関する著作の例をいくつか挙げる。

ファン・ホッホの生涯と精神病　上・下巻　聚樂社　叢書　1932

ファン・ホッホ兄弟の生涯（「日本医事新報」666－668）日本医事新報社　1935

焔と色　小説ヴァン・ゴッホの生涯（ステファン・ポラチェック／著）牧野書店　1941

ヴァン・ゴッホの生涯　東京堂1943

ゴッホの素描　アトリエ社　1943

テオ・ヴァン・ゴッホの手紙　一兄ヴィンセントへの手紙　創芸社1952

ところでゴッホを日本に本格的に紹介したのは、武者小路実篤らが創刊した『白樺』である。『白樺』は文学雑誌ではあったが、西洋美術の紹介に情熱を燃やし、マネ、セザンヌ、ゴーギャン、ファン・ゴッホ、ロダン、マティスなど、印象派からポスト印象派、フォーヴィスムまでの芸術を、順序もなく一気に取り上げた。特にゴッホについては第一巻（明治四十三年）から第十四巻（大正十三年）までの間に約六十点の文献と挿画七十三図を掲載した。

前述したが、式場は大正六年頃から『白樺』を愛読、ゴッホに興味を持ったのもこの『白樺』からで。これによりゴッホを熱愛するようになった。大正九年頃にゴッホに心惹かれ、大正十年頃よりゴッホ研究をはじめ、昭和四年にヨーロッパへ赴き本腰を入れるようになった。

「医学者となり精神病学を専攻するようになった自分は今まで単に芸術的な感激を以てのみ愛していたファン・ゴッホを、新しい観点から科学的にもみつめるようになった。」（昭和六年）

ゴッホの経歴

現在ではゴッホは日本でも特に有名でゴッホを愛好する日本人も多い。思い起こせば昭和六十二年、ロンドンで行われたオークションで、目玉として出品されたゴッホの「ひまわり」を日本の保険会社が落札した。落札価格は五十三億円。円高、金あまりの中で有利な投資先を求めてジャパンマネーが海外に流れて行った時期だ。海外の不動産投資ばかりではなく「ひまわり」などの名画も数多く日本人に買い集められた。以降、この保険会社ではアジアで唯一、ゴッホの「ひまわり」を見ることができる美術館として、親しまれている。

改めてゴッホの経歴をみてみよう。

「Vincent Willem van Gogh（1853年3月30日－1890年7月29日）オランダの画家。ゴッホはドイツ語読みにもとづく日本での慣用。後期印象派を代表する一人。ベルギー国境に近い小村のフロート・ズンデルトの牧師の家に生まれ，中学卒業後美術商グーピルのもとで働いたり，牧師職につこうとしたりしたが成功せず，1880年ブリュッセルの美術学校に入学。《じゃがいもを食べる人々》（1885年，アムステルダ

ム，ゴッホ美術館蔵）などのような重苦しい形態と暗い色彩の修業時代をオランダで過ごすが，1886年パリに出て，印象派や浮世絵の影響下に明るい色彩に転じた。その後，ゴーギャンとの交友・別離を経て1890年にオーベール・シュル・オアーズで狂気のうちにピストル自殺を遂げるまで，アルルやパリ周辺の風景，自画像などを好んで描き，奔放なタッチと強烈な色彩により苦悩に満ちた魂を表出した。フォービスム，表現主義に与えた影響は大きい。代表作に《星月夜》（1889年，ニューヨーク近代美術館蔵），《オーベールの教会》（1890年，オルセー美術館蔵），《烏の群れ飛ぶ麦畑》（1890年，アムステルダム，ゴッホ美術館蔵）などがある。また，自画像や肖像画も多く残している。また彼を終生援助した弟テオにあてた書簡集は《ゴッホの手紙》としてまとめられて刊行されている。（中略）しばしば精神病の発作に悩まされ、自らの耳を切り落とすという「耳切り事件」を起こした。（略）晩年の1890年1月に『メルキュール・ド・フランス』誌に発表されたアルベール・オーリエの評論で、既に高く評価されていた。オーリエは、「フィンセント・ファン・ゴッホは実際、自らの芸術、自らのパレット、自然を熱烈に愛する偉大な画家というだけではなく、夢想家、熱狂的な信者、美しき理想郷に全身全霊を捧げる者、観念と夢とによって生きる者なのだ。」と賞賛している」（ウイキペディアより引用）

ゴッホが三十七年の短い生涯を終えたのは一八九〇年、式場はその八年後に誕生している。

「ゴッホ」の表記（呼称）

私はオランダ語については全く分からないが、実はオランダ語の発音では、Gogh は「ゴッホ」ではなく、「ホッホ」らしい。しかも、日本では「ゴッホ」として定着してしまったが、Van Gogh が苗字としての一かたまり（オランダ人名のファン(van)はミドルネームではなく姓の一部であるため省略しない）で名前（ファーストネーム）がビンセントである。Willem はミドルネーム。

「ゴッホ」の表記には「ホッホ」「ゴオホ」「ゴオホ」「ゴーグ」「ゴホー」などいくつかある。アメリカ英語では（ヴァンゴウ）と gh を発音しないのが一般的である。彼が作品の多くを制作したフランスでは、「ヴァンサン・ヴァン・ゴーグ」となる。日本語では英語風のヴィンセント・ヴァン・ゴッホという表記も多く見られる。英語圏の観光客が「ヴァンゴー」というのを、オランダ人は今でもからかってるようだが、実際は世界的VIPとなった彼を「ヴィンセント・ヴァンゴー」と呼ぶ人口のほうが圧倒的に多いはずである。

式場の文章でもゴッホの表記には変遷が見られる。

「医学者となり精神病学を専攻するようになった自分は今まで単に芸術的な感激を以てのみ愛していたファン・ゴッホを、新しい観点から科学的にもみつめるようになった。」

（昭和六年）前述

「・・・セザンヌもゴオガンも讃仰された。しかしファン・ホッホには作品ばかりでなしに感動的な生涯があった。・・・」『ファン・ホッホの生涯と精神病』（昭和7年）

「私はいつもゴォホの偉大さに打たれる。・・・」

（昭和十六年）

「ファン・ホッホの悲 劇的な生涯とその作品は・・・」

『宿命の藝術』（昭和十八年）

「ヴァン・ゴッホ書誌を世界中で最も早く発表したのは、私である。」　（昭和三十二年）

『白樺』でも古くは表記が異なる。

「バン・ゴオホ

武者小路実篤

バン・ゴオホよ
燃えるが如き意力を持つ汝よ（後略）」

『白樺』第二巻（明治四十四年）

話はそれるが、**「ギョエテとは俺のことかとゲーテいい」**という川柳（?）がある。ドイツを代表する文豪ゲーテ（日本語読み）のヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe）。「ゲーテ」（Goethe）のドイツ語での発音は日本人には難しいこともあり、日本語表記は、古くは「ギョエテ」「ゲョエテ」「ギョーツ」「グーテ」「ゲエテ」など数十種類にものぼる表記が存在したという。Goethe は、「oe」の部分のウムラート発音の関係で、実際には「ゴーテ」と「グーテ」の中間ぐらいの発音になるらしいが、それをどう表記するかで多くの表記が生まれたようだ。この件に関しては、品川力著『古書巡礼』（青英舎版、1982年）所収の「二十九人のゴッホ・四十五人のゲーテ」に詳しく書かれている。ここでも**「二十九人のゴッホ」**とあり、ゴッホの表記が二十九種類あるとしている。閑話休題。

ゴッホの書簡とゴッホ研究

ゴッホの作品が、ゴッホの死後評価されるきっかけとなったのは、ゴッホが書いた書簡だった。フランスの文芸誌に連載された書簡を詠んだ人たちが感動し、作品に注目したのだ。日本では明治四十四年以降、何人かがゴッホの書簡を訳出し紹介した。しかしゴッホが書いた膨大な量からするとほんの一部分の抄訳に過ぎなかった。そこで式場はゴッホの書簡の全体を網羅することを試み、書簡の精読をゴッホの生涯とその作品を理解するのに必要不可欠なものとして捉えた、「私はアン・ゴッホの書簡集の価値の高さを今更ながら知った。作品の解説でもあって、それを読めばすべては理解できるからである」『ヴァン・ゴッホ』まえがき（昭和二十九年）

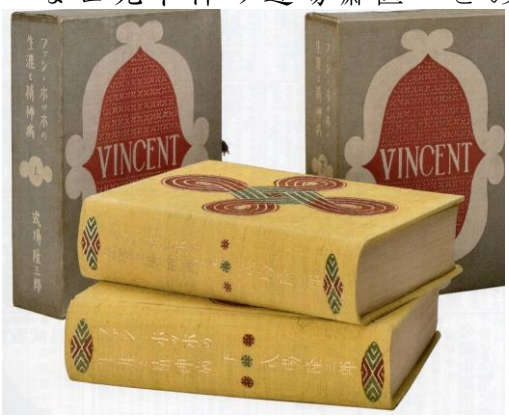
それまで日本では、主として芸術家について、その精神状態と作品との関係を精神医学的立場から研究すること（病跡学（パトグラフィー））はなされてなかった。式場は精神医学の視点を重視してゴッホ研究に取り組み、普及活動にも力を注いだ。

「ゴッホは人格、行動、道徳、生活等と芸術的作品とは飽く迄統一体として把握されるべきである。作品は精神的全存在をその根底とする創造である」（ドイツの精神科医・カールヤスパース）

式場はこのヤスパースの説に魅了され、これを受け継ぎ「最も正確で詳細な伝記の執筆」と「ゴッホの精神

病の究明」を目的として『芸術病理学』を提唱し、研究を進めた。彼のゴッホの病跡学に関する研究成果は、昭和七年の著書『ファン・ゴッホの生涯と精神病』として結実した。

同じ精神科医であり歌人の斎藤茂吉は「式場隆三郎博士は近時、『ファン・ゴッホの生涯と精神病』を著した。本書はゴオホ研究書のうちでは世界第一に精細なものとおもふ」、「式場自身の説は、癲癇(てんかん)性精神病説に一致し、近時独逸のリーゼといふ人の記述した散発性朦朧症とも一致している」と評価した。



これにより、式場は日本における代表的なゴッホ研究者としての地位を確立した。

式場は、昭和四年、欧州を旅行、ゴッホの作品や遺族の調査文献や資料、複製画などを収集しファン・ゴッホの研究と日本での普及に努めた。日本では複製というと「安い、つまらないもの」と思われがちだが、西洋では当時も複製と言っても立派な印刷美術品とし認めていた。式場も実際に収集した複製画の価値を彼なりに評価したのだ。戦後何度も開催された「ゴッホ展」で展示した複製画コレクションは、式場がその印刷技術を高く評価していたドイツや、オーストリアなど西洋諸国で製作されたもので昭和二十年代、世界的に秀逸なコレクションとして評価を得ていた。式場が開催したゴッホ展は、原色版複製や文献を展覧したもので、原画は一点もなかった。

日本人のゴッホ観形成と式場の貢献

日本の現代人のゴッホ観を形成するうえで重要な働きをしたのは、①式場の仕事と②劇団民藝による戯曲「炎の人 ヴァン・ゴッホの生涯」(三好十郎脚本、昭和二十六年初演)、そして③小林秀雄の評伝「ゴッホの手紙 書簡による伝記」(新潮社、昭和二十七年)であると木下長宏(美術史学者)は指摘している。

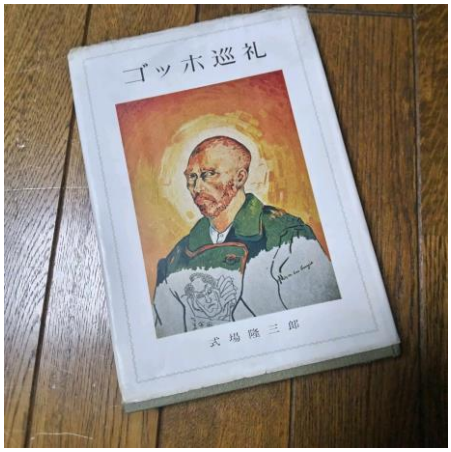
式場に関する仕事(著作、書簡の翻訳、複製画展、講演会など)は勿論のことだが、式場は戯曲「炎の人」には製作顧問として脚本について協議する段階から関わり、重要な役割を果たしたし(注1)、小林が「ゴッホの手紙」を執筆するうえで借りたゴッホの書簡集全集は式場所蔵のものであった(注2)。(山田真理子『式場コレクションによる「ゴッホ展」の周縁』より引用)

(注1)「…そこで方針をかえて、創作を誰かにたのむことになった。候補の劇作家の中から、岡倉士朗、瀧澤修両君と私で相談した上で三好十郎君が決定した。私たちは三好君と逢って、いろいろ話しあった。そして信頼できることがわかった。私は資料を提供した。三好君は三ケ月この仕事に没頭して、ついに書きあげた。…」「炎の人」の上演について」(『芸の仲間』『炎の人公演特集1951・9)左は当時の上演ポスター

(注2)「ゴッホが弟テオに宛てた書簡に関しては、ボンゲル夫人の編纂した膨大な全集があるとは予てから聞いていたが、式場隆三郎氏の御好意で、それが拝借出来たのは有難い事であった。…」(「芸術新潮」1951)

式場は、会長を務めるハンドボール協会関係の職務、精神病院の視察、そして念願であるゴッホ研究のため、昭和二十七年六月から十月までヨーロッパ、アメリカに赴いた。戦災で失ったゴッホ文献や新たな資料を収集するために連日のように書店をかけまわり、美術館や個人所有のゴッホの作品を鑑賞したり、ゴッホゆかりの地を訪れた。

この様子は『ゴッホ巡礼』(学風書院、昭和二十八年)に詳述されている。



式場が海外でのゴッホ巡礼の旅を行った翌年、昭和二十八年はゴッホ生誕百年の年であった。式場はゴッホ関係の数々の催しに携わった。日本橋の丸善本社で、収集したゴッホ文献、複製画など計七百五十点を分類して、大展覧会を開催。展覧会は連日大盛況で、開会時間を一時間延長するほどであった。各メディアも展覧会の様子を伝えた。日本で、ゴッホの原画を鑑賞する機会がなかった時代、この複製画の展覧会は、ゴッホの作品にふれる貴重な機会になった。展覧会は全国で三十回以上開催され、研究者や愛好者だけでなく、大勢の一般人が来場した。動員人数は全国で数十万人規模に上ったという。

(参考文献)

『炎の人 式場隆三郎 ―医学と芸術のはざまで―』(市川市文学ミュージアム図録4 2015年)
『式場隆三郎「脳室反射鏡」』(新潟市美術館ほか2021年)

第四十四回短歌の会（最終採択の一首）

十一月二十八日実施

対岸と此岸の氷伸びゆきて
　ぶつかる手賀の遠き日のあり　村上　智雅子

木下（きおろし）の河岸からひと日川めぐり
　水面にうつる雲くずしつつ　納見　美恵子

群れ咲けよおうちの花は春の日に
　かの世の秋には曼珠沙華咲け
「おうちの花」…楝（おうち）は、若葉が繁ったあと淡紫色の小さな花を房状に咲かせる。遠くから仰ぎ見ても美しい花である。「アフチ」は梅檀の古名で、万葉集にもその名を見ることができる。（編集者註）　佐々木　侑

投票し真白き富士の峰望む
　柊薫る子の神階段　芦崎　敬己

ひと様の思惑外す我が性質（たち）は
　負けず嫌いとつむじ曲がりか　美崎　大洋

人肌の温みのよふに秋の日（かいな）が
　差し来れば強き　腕（ほ）を欲りつ　伊奈野　道子

移り住む坂のある道ゆく人に
　なれて親しも声かける男の子に　大島　光子

楚人冠俳句

昭和九年冬

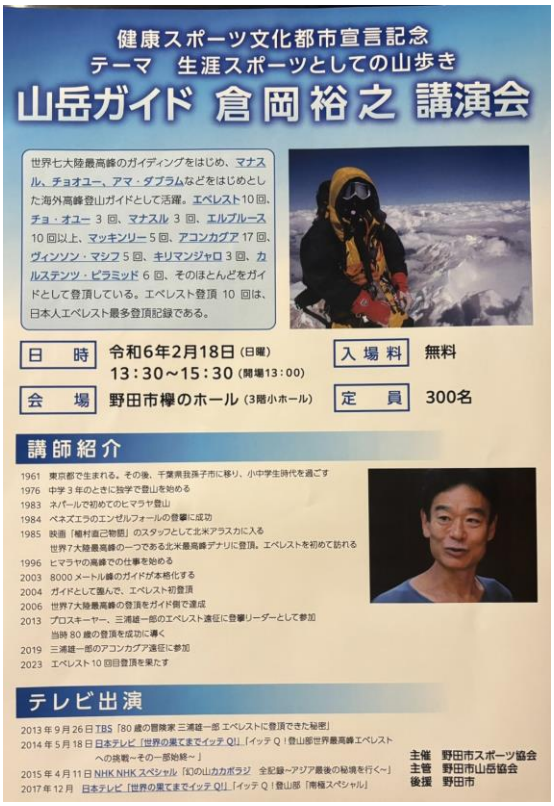
引き上げし川舟かわき柳枯れ
柳枯れて氷の上の小石かな
一もとの冬木にからむ煙かな
枝岐（えだまた）に小雪且つ残る冬木かな
もえつかぬ暖炉にこゞむパジャマかな
雨に賭けて俎をたゝく時雨かな
向ひ合ひて小指を結ぶ時雨かな
雨に賭けて蜜豆をごる時雨かな

当会の行事予定

□「放談くらぶ」
日時　2月24日(土)14時～16時
会場　市民プラザ会議室―1
講師　稲村　隆氏（市教育委員会生涯学習部文化・スポーツ課　歴史文化財係　主任学芸員）
演題　「稲村雑談―我孫子の文化を守る会へ―」
参加費、会員無料、非会員三〇〇円
申し込みTEL(7185)0675　佐々木まで
（12ページ「あびこだより」参照ください）

□プロジェクト「短歌の会」
第四十五回短歌の会
日時　1月23日(火)13時30分～
場所　けやきプラザ10階小会議室
◎見学ができます(080-3410-4426(美崎)

□プロジェクト「巨木、銘木をめぐる会」
日時　2月25日(日)9時　我孫子駅改札口集合
観察先　上野公園・東京芸術大学構内
連絡先　佐々木　〇九〇―二五九四―〇四二五



倉岡裕之氏講演会のお知らせ（右ポスター）

日時　2月18日(日)13時30分～15時30分
会場　野田市欅のホール（最寄り駅・愛宕駅徒歩10分）
入場料　無料（定員300名）

編集後記　今回の会報、初めて18ページになりました▼今年は辰年。「辰」は十二支の中では唯一架空の生き物で龍（竜）を意味する（「龍」は旧字体、「竜」は常用漢字）。水や海の神として祀られてきた竜は、竜巻や雷など自然現象を起こす大自然の躍動を象徴するもので、「竜が現れるとめでたいことが起こる」と伝えられてきた。干支では「甲辰」、これは「成功という芽が成長していき、姿を整えていく」といった縁起のよさを表している▼中国では皇帝のシンボルとして「竜顔」「竜衣」など帝王に関係するものには竜がつくことが多く、最上級の意で竜を用いる▼植物の名前では「竜の髭」がある。これは形状からつけられた。「竜胆（りんどう）」は干した根を生薬として用いるが、あまりにも苦く胆汁のようなので、最上級の竜を冠した▼鯉が滝をのぼって竜になったという中国の故事から、立身出世の関門のことを「登竜門」と呼ぶ。一方、竜の字はないが、「逆鱗に触れる」も実は竜にまつわることわざだ。竜は長い髭をたくわえるが、顎の下に1枚だけ逆さに生えた鱗があることから生まれた。（美崎）

当会のホームページ　http://abikonobunka.sakura.ne.jp/